

町田市史 下巻

大正・昭和

第一章 大正時代の町田

第二節 関東大震災と市域

大地震発生

「その日は九月とは名ばかりの真夏のような暑さで、風も死に、炒られるようであった。私の店（エビスヤ靴店、現吉川百貨店の位置）はそのころ一日、十五日が定休日だったので、八王子の学校を早く帰ってきた私を、父が釣に連れてゆくというので、近所の溝をあさり、みみずを掘り餌箱を父に渡した。折柄食事のおかずは豚肉のシチュウで、よいにおいが空腹をうった。その頃の町田は都市ガスはもちろん、プロパンさえなく、カマドに大きな鉄鍋だった。もちろん焚木は薪である。なにか突然境川の方からゴーッという地鳴りと同時にぐらぐらときた。その震動は私どもが理解している地震というイメージをはるかにこえていた。上下動と水平動の混合でこの世の終わりを思わせた。全く初期微動等は感じられず、ゴーッのぐらぐらであった。」これは原町田に住むM氏がとくに寄せて下さった追憶である。（「関東大震災の思い出」）。

この運命の日とは大正十二年（一九二三）九月一日午前十一時五八分四四秒六、酒匂川口須賀村と大島千が崎を結ぶ線と伊東町と館山町を結ぶ線のクロスした東経一三九度二分八秒、北緯三四度五八分六秒（相模湾）を震源地としたマグニチュード七・九（烈震）の地震であった。この地震は東京、神奈川、埼玉、静岡の一府三県、とくに関東地方南部の揺れ方は激しかった。

東京市は地震直接の被害よりも火災による第二次災害が大きかったため府下の震動はあまり注目されていないが、図版9（省略）でみるように市域は相模湾の北北東にあり、震源地には市域の方が東京市街地より距離的に近く揺れ方は市域のほうが激しかったと思われる。

南関東で関東大震災の規模の地震で大被害がでたのは安政二年（一八五五）の「安政の大震災」である。このときは、江戸亀有付近が震源地で「直下型」であり、規模はマグニチュード六・九、死者七〇〇〇人から一万人、焼失家屋一万四〇〇〇戸といわれる。明治に入って東京をおそったマグニチュード五以上の地震は一五回で、その震源地分布は図版10（省略）であり、相模湾でマグニチュード八程度の大地震の周期は約二〇〇年といわれている。その間、マ

グニチュード六規模の地震は明治二七年（一八九四）六月二〇日、東京地方を襲ったもので、このときは死傷者一五〇余名、家屋全潰二九戸、家屋破損のはなはだしいもの二二〇〇余戸であった。しかし「安政の大地震」から「関東大震災」は六八年を経ていて、大地震の体験者はわずかしかなかった。多くの人々ははじめて大地震を体験したのである。

当時、神奈川県酒匂小学校の訓導であった鶴間のI氏は当時、学校に在って、その時の模様をつぎのように語っている。

私は激震地に一番近い所にいた。小使いさんたちが逃げだしてコロコロころがっているのが向こうに見える。また木につかまっているのが見える。地面がどおっと持ち上がってきて顔にぶつかるような感じで、それはひどい揺れ方で今では想像はできません。

関東大震災を経験した人々は異口同音に当時の恐怖をつぎのように語っている。

今の都道三九号線は当時六尺道路でした。これが真光寺から丁度私のところを出た線から広袴は、全部一瞬のもとに八裂になり辛うじて両端の残ったところを歩いて通った。橋はことごとく破壊された。（真光寺 O氏）

地震というものはおっかないものだなあということをつくづく感じさせられたのは、上下動だからくるものもくるものも皆上にいってしまう。横にくるというのはない。したがって私のすぐそばに橋があったがその橋などは一番先に落ちた。それで私の家の前は十字路のそばですから東西・南北と道路があるが、その道路が揺れるたびに大人の足が二本一緒に入るくらい口のあき、ひどいものでした。（相原 N氏）

避難

青天の霹靂ともいふべき大地震に見舞われた市域の人々は、どう対処したのであろうか。

私は無意識に店（エビスヤ靴店）へかけ出したが、棚のものがガラガラ落ちるのに驚き、あわてて裏の空地へ転がりながら飛び出したがすでに縁側は壁土でざらざらしていたのを忘れない。近所の人たちもやはり身の危険を感じてか三百坪ぐらいの空地に集まった。そしてだれ一人立っている人はなかった。

びびっと地割れが走るので誰かが雨戸を五、六枚はずして来たので、みんなそれに乗った。幸い人が呑まれる程の地割れではなかった。少したつともうもうたる土埃が上り、空もくらみ天地玄黄として壁土の臭いがむせるばかり。この間にもぐらぐらの連続で息つくひまもなかった。

お年寄りが「マンダラク、マンダラク」と片手拝みをしているので何の事かわからなかったが子供達も真似をした。そうすると何か心安まる思い

であった。

大揺れがひととおり終わったころ誰かが叫んだ。「火の元を気をつけろ！」みんな“あっ”と思った。どこの家でも昼食の仕度で必ず何かしら煮物をしていた筈である。そこに誰かが気がついたのだ。いくらか余震が弱まり、どうやら立って歩けるようになったので、私は一目散にお勝手に走った。天の摂理というか、幸運と云うか貴重なシチュウの鍋がそこでひっくりかえり薪の火がシチュウの焦げた匂いを漂わせ、細々と煙りをあげていた。自然に消火されたのである。しかし、それを確かめるのはお勝手の鍋や茶碗や皿の山を片付けなければならなかった。そこで私は初めて空腹を覚えたものである。

たしか夕方になって握りめしを食べた記憶があるが、誰がどう持って来たのか記憶がない。夕方になっても間断なく余震が来たが、だんだん地震に馴れたというか、今夜の寝る所を大人たちは相談していたようである。丁度そのころ I 氏の竹藪があったので（今のマツヤマ百貨店の裏あたり）その中にむしろを布き、壊れた家からなんとか布団を引張り出し蚊帳を吊り、一家雑魚寝と相成った。勿論電気はないしローソクの灯りが何本かゆらいだ。

大人達はおそらく緊急にムスビを作る相談をしたものであろうか、竹藪の住人には、どうやらムスビと沢庵と梅干しがきた。お茶は勿論なかったが車井戸は釣瓶が落ちているので水も汲めない。塩のきいた握りメシは咽喉が焼けつくばかりであった。（前掲 M 氏回想記）

このように市域の人々は、昔から竹藪は地下に強く根を張っているので絶好の避難場所として竹藪に逃げ込み、残暑の厳しい時節であったので夜は蚊張を吊って蚊を避け、家屋の全壊・半壊の難にあった住民は地震発生後、一週間も竹藪での生活を強いられた。

市域の被害状況

それでは市域の被害はどのくらいあったのであろうか、『大正震災志』による家屋・人的被害は図表 20（省略）、道路・橋梁の被害額は図表 21（省略）、そのほか郡単位の建物・損害金額見積・養蚕の作柄被害状況は図表 22（省略）にそれぞれ示した。

市域内の死傷者のうち地域別では堺村が圧倒的に多い。これは堺村相原では、谷戸が部落を形成していたので地震による山崩れ、崖崩れ等によって死傷者が多く出た。

山崩れのため形なしになった家が二軒あった。それから一軒は半分もが

れた。それらのうちの一軒は家族六人が全部生き埋めになった。そのうちのお嫁さんと子供がその日の夕方に土の割れ目から泣き声を出しているというので掘出し二人は助かった。もう一軒の方は夫婦で住んでいたが山が崩れてくるので、旦那さんは奥さんの手をひいて逃げだそうとしたところへ山崩れが来て、その奥さんは胸から下を埋められ、旦那さんの方は左足を埋められてしまった。二人とも近所の人が掘り出したが旦那さんの方はびっこをひきながら一ヶ月ぐらい薬を塗っていたが、奥さんの方は「痛い！痛い！」と叫びながら二日の朝に亡くなった。（相原 N氏談）

町田町の死者は、町田銀行のコンクリート塀が倒壊して支店長代理、南大谷のA氏と原町田三丁目のUさんの祖母が下敷となって即死している。

相原では小学校の天井が三教室とも落ちたにもかかわらず児童たちには被害がなかった。当日鎮守社のお祭りで先生が児童を引率して鎮守社に参拝の途中地震にあったため、小学校を空にしている難をまぬがれたのである。

家屋の倒壊は町田町では神奈川街道沿いの目抜き通りで六〇余戸の倒壊家屋を出した。また横浜線原町田駅（二日の余震）、鉄筋ブロック建の瀬谷銀行原町田支店、鉄筋コンクリート建の町田銀行、丸通の倉庫が全壊した。また、堺村相原尋常小学校校舎（間口一三間、奥行五間半）は半潰大破した。半潰という住めるような印象を与えるが、マッチ箱を潰したような状況でも半潰と認定された。この調査はのちに住民の不満をかったという。

鶴川村では年代を経た家が多く、半潰の家ではとても住める状態ではなかった。倒壊家屋が多かったにもかかわらず地震による火災の起こらなかったのは不幸中の幸いであった。

この地震によって水脈にも変化があった。町田町では菜園の傍の水溜りが、いつの間にか跡かたもなくなり、ぬかるみも濁いた。地震発生から一時間あとに境川の水が増水し、雨が降っていないのに数日分ぐらいの雨量と思われるほどの水が約半日ぐらい増水を続けたという。また、小山から下のほうは水が少なくなり、鶴見川・恩田川は湧水が増えたといわれている。道路は地割れし八裂のように破壊され、橋もほとんど落ちてしまった。当時はコンクリート製の橋は少なく多くは土橋であったからである。

産業などへの被害

関東大震災の経済的損失は、京浜工業地帯が潰滅状態となり、被害金額は約六五億円とみられる。一一年の国家の一般会計予算が一四億七〇〇〇万円であるから、約四ヵ年分が灰になった計算になる。

市域の町村道、橋梁、護岸の被害は図表2-1（省略）で南多摩郡の全損害中の約七〇パーセントを占めている。養蚕者の被害状況も図表2-2（ハ）（省略）

のようで、市域の重要な産業に大きい打撃をうけたのである。真光寺 O 氏は鶴川村の産業の被害をつぎのように語っている。

一番被害を受けたのは田圃です。でこぼこになり、あちらの端は山になり、これは自然に揺すぶられて山になったものです。鶴川辺で一番被害を受けたのは柿の生産です。養蚕に次いで収入源で、米のとれないときの生活の補助をしていたのが禅寺丸でした。ところが震災のために柿が全部だめになってしまいました。それは柿の根がすっかりいじめられてしまったからです。それが震災後昭和一六年かに一回なったように記憶しています。極端なことを申しますと昭和二〇年まで自然の収穫はありませんでした。田圃などは地割れによって水を張ってももたず、したがって米の収穫はいくらもなかった。

(注) 一三世紀のころ、今の川崎市柿生の王禅寺住職であった等海上人が本堂再建用の用材を選ぶため山に入ったとき、深紅の色に燃えた柿の老木を発見し、その実をとって味わったところ、実においしいので、早速これを寺内の柿に接木をすると共に、付近の農家にもすすめて接木をさせた。これが段々広まって、この地方一帯が柿の名産地となった。この禅寺丸が江戸に出て町民に愛好され、初めはその地名をとって王禅寺丸と呼ばれていたが、呼びにくいので王の字を省いて、ただ禅寺丸と言われるようになった。禅寺丸の生産地域は川崎市柿生を中心とした地域で、市域では鶴川村、忠生村で、鶴川村では能ヶ谷、三輪のものが最も良質とされている。

(『鶴川村誌』九五～九六頁)

横浜線では地震のため長津田駅と中山駅の間を走っていた列車が災難にあい、貨車四輦が脱線転覆した。横浜線は被害甚大で原町田駅～八王子駅間が復旧開通したのが九月二〇日、原町田駅～東神奈川駅間が九月二八日であった。市域内の横浜線の沿線では南村成瀬の西から高ヶ坂へかけてひどく、当時の人々は「地震の道」と呼んだ。また、町田町森野で線路の裾が全部崩れてしまった(成瀬 K 氏談)。

救援活動

地震発生後、町村役場吏員、在郷軍人、青年団員らはまず市域の被災者の救援に当たったが、食糧などは自給体制をとり、他地方からの援助を受けずに済んだ。九月二日からは横浜・東京方面からの罹災者が郷里あるいは縁故を求めて移動するため市域を通過した。横浜方面から神奈川街道や横浜線沿いに、東京方面から鶴川街道沿いに引きもきらず罹災者が続いた。市域町村吏員、在郷軍人、青年団らは一転して市域通過の罹災者の救援に当たることになった。その活動の様様を当時、町田町役場吏員であった本町田の O 氏は、震災の晩はと

にかく役場職員を徹夜で被害の調査に全部出した。その翌朝から避難民が横浜から来る者と東京市内から神奈川県の方へゆく人と思うが、震災当日の夕方早く罹災地を出て食事をしていないということなので握飯を出したりしました。役所はその時分、あまり大きくなかったので夕方遅く来る者は会議室を開放して、それに毛布をしいて罹災者を一まとめにした。それも五人や一〇人ではなく大勢である。多い時には五〇人もいた。どっちへ帰るのかと聞いてみると横浜の方から山梨県とか中央線方面へ帰る人が多い。親子連れが大部分で、かろうじて逃げ出して自分の実家へ帰るといっているのである。このように大量の罹災者が市域へ来たのは六日目位までで、それから一〇日まではボツボツあった。避難してくる者がなくなってきたのは九月一〇日も過ぎたころでした。避難者の方々に弁当をとってあげるわけにもゆかず、炊出しをしてあげました。役場でも心配したり、苦勞しました。と語っているように町田町では役場吏員・軍人分会員・青年団員が協力して地震対策本部をつくり、避難所の設営、食糧の配給、通過者の救済に昼夜を分かたず活躍して感謝された。当時、市域内にとどまった避難者は図表23（省略）のようで南多摩郡の中では最も多い。また、南多摩郡臨時震災救護会からの寄付募集に当たって、市域の町村では被害を受けたにもかかわらず、割当ての三・五倍から八・五倍もの寄付を行ない心意気を示した。

その他、在郷軍人分会は衣類などを寄贈したが忠生村処女会は二九〇点の救護品を麻布支部に寄贈委託した。

前述のように横浜線が寸断されたため、その復旧工事に当たる任務をもって九月五日ごろ習志野の鉄道聯隊から一箇小隊が町田町に出勤し、一箇中隊ぐらいが南村に駐屯したため、兵士たちの宿舎設営が役場の大きい仕事になり、南村に駐屯した兵士らは民家に分宿、町田町では兵士のために銭湯が満員になって困ったという（O氏・K氏談）。